

第10号刊行あいさつ

専修大学創立一三〇年の二〇〇九年は本学大学史にとって画期的な年であった。一三〇年を記念して『専修大学の歴史』が平凡社から刊行され、教員・職員、在学生のみならず、卒業生をも視野に入れた企画であった。また、『専修大学史紀要』の創刊もこの年であり、さらにこの年度に自校史講座・総合科目Ⅲ「日本の大学史のなかの専修大学」が開講された。あれから一〇年、『専修大学史紀要』第一〇号が刊行されるはこびとなった。

その内容・構成は、講演録、研究論文、研究ノート、史料紹介、調査報告、彙報、ときに座談会などとなっている。自校史（大学史）講座の内容にもおよび、学生のレポート（感想文）のいくつかをほぼ原文のまま掲載するのも、学生に寄り添い、その声を聴くという専修大学の姿勢のあらわれである。

他大学の大学史紀要等と厳密に比較したわけではないが、『専修大学史紀要』の特徴は、第一に、自校史講座で理事長・学長自らが学生たちに大学の歴史、大学の現況、未来への展望について講義することである。大学のトップが学生に直接語りかける機会は学生の意欲を大いに駆り立てることになる。とりわけ、二一世紀ビジョンとしての「社会知性の開発」は、社会で何が問題なのか、自分で見つけ、自分の力で主体的に解決する知力を身に付け、社会に巣立つことを願うもので、このことはほぼ毎号巻頭に理事長・学長の《講演録》が掲載されていることに反映されている。

第二に、口絵にみられる諸行事の記録、とくに質量ともに優れた企画展の記録である。主なものは創立者をテーマにした企画展であるが、その出身地の博物館を会場とし、かつ本学との共同企画としてなされたものである。開催順に、三重県桑名市博物館での「駒井重格の軌跡―専修大学の創立者、一橋の名校長」展、鹿児島県黎明館での「日本の財政学を築いた薩摩藩士―専修大学創立者・田尻稲次郎の生涯」展、東京都墨田区たばこと塩の博物館での「目賀田種太郎と近代日本―教育者・法律家・官僚として―」展である。ほかにも三・一

一東日本大震災で被災した石巻市・石巻専修大学と共同企画で、専修大学校歌の作詞者で、被災後の多くの人に愛唱された「唱歌斉唱―『故郷』の作詞者・高野辰之の生涯」展も仙台市で開催した。地方での開催はその地の卒業生との交流の場を提供するものとなった。在学生のみならず、専修大学の卒業生に対する想いのあらわれである。ここではふれないが、大学史資料課が企画、共同企画したミニ企画展も多数ある。

第三に、本学は創立一三〇年記念事業の一つである『専修大学の歴史』発刊にあたって、青木美智男編集主幹のもと専修大学史編纂事業アドバイザー部会が組織された。そこでは一五〇年にむけて事業計画まで策定された。このように将来を見据えての事業方針は、各委員をして大学史に関連して文科省科学研究費の助成を受けることにつながった。基盤研究（C）「文系私立大学における学徒出陣の基礎的研究」（代表新井勝紘）は『専修大学史資料集 第七巻 専修大学と学徒出陣』（二回配本）に結実した。また、基盤研究（C）「相馬永胤家文書の基礎的研究―私学創設者の多面的分析のためのアプローチ」（代表大谷正）と基盤研究（C）「明治・大正期の私立法学教育機関における実務家教員の基礎的研究」（代表高木侃）も採択された。本紀要がその成果の一部としての報告・史料紹介等の役割を果たしている。以上が『専修大学史紀要』の特徴といえる。残念なことであったが、紀要発刊を含め、大学史編纂事業に主導的役割を担った青木美智男編集主幹が研究調査先で急逝された。さらに後を追うように就任間もない矢野建一学長も急逝された。お二方の最終講義になったものは、奇しくも自校史講座での講義であり、追悼文とともに「夜学の隆盛と専修学校」（第六号）、「歴史を『かがみ』に―戦後の専修大学と今村力三郎―」（第九号）が掲載された。専修大学をこよなく愛された青木・矢野両先生の遺志を継ぎ、一五〇年にむけ、『専修大学史資料集』全一〇巻の刊行を目指し、微力ながら本学大学史の発展に寄与することを誓い、『専修大学史紀要』第一〇号刊行のあいさつとしたい。

専修大学史編集主幹 高木侃